

# 紀州東照宮の伝徳川家康所用小袖四領

## ——紀州東照宮染織品調査報告 二——

神 谷 榮 子

### 内 容

- 一 はじめに
- 二 小袖四領の概要
- 三 各小袖について
- 四 むすび

### 一 はじめに

この報告では紀州東照宮所蔵の徳川家康所用と伝えられる四領の小袖と、先年山口県の教育委員会が県下の文化財総合調査を行った際に、その調査に参加しておられた文化庁美術工芸課の鈴木友也氏が初期小袖であることを確認された石見益田家伝来の一領を加えた、新出五領の初期小袖を取扱う。そして約二十年前にまとめた「近世小袖実測寸法比較対照表(男物)」(美術研究二二八号所載の拙稿「伝上杉謙信所用小袖十二領」参照)にこれら五領を加えて表を新たにし、検討したいと考える。

なお、副題の「紀州東照宮服飾類調査報告」のうち「服飾類」をこの報告二から「染織品」と改める。それは茶壺に付属する茶壺口覆や底敷

ぶとん、棒状枕、茶壺袋、また頼宣所用の鍬形納入時絵箱に入っていた八枚の摺箔袋など服飾品以外の染織品が、これまでの八回の調査中、五回目以降続々と数を増したからである。

### 二 小袖四領の概要

四領共に家康所用と伝えられており、その伝来は、報告一(美術研究三〇六、三二〇、三二一号所載)でも述べたようにA(徳川家康所用品を紀州初代藩主徳川頼宣が東照宮に寄付したと伝えられているもの)に所属するもの三領、B(徳川將軍家よりの拝領品を明治四年五月に紀州旧藩主の正二位徳川茂承(もろつぐ)〔明治三九(1906)〕が東照宮に寄付したと伝えられるもの)に所属するもの一領である。

四領とも出来た当初のまま後から手が加えられていない生な仕立て、形状も初期小袖の特徴を具えており、裂地、文様、染織技術、裁縫技術共に初期小袖の室町・桃山時代の特色が顕著である。更に細かく検討するとその様相は桃山末から江戸初頭の所見で、家康晩年のものと思われる

る。尾張や水戸の徳川家に伝来する家康所用小袖と同時代のものであろう。

四領共に保存状態は極めてよいと言える。報告一に記した伝来別分類A、B、

C、D、Eにそれぞれの通し番号を付したのが、各個

の遺品番号で、家康所用と伝えられる四領の小袖はA-13、A-14、A-15、B-4である。そのうちA-13、A-14、B-4の三領が昭和五十二年六月に重要文化財に指定された。

### 三 各小袖について

A-13 伝家康所用

重文 浅葱地宝尽し小紋小袖(挿図1 a、b、c、一三頁表、台帳では宝尽し

小紋小袖)

綿入れで、五つ紋付。<sup>註1</sup>仕立は当初のままのうぶなもの。袖幅が狭く身

幅が広い、襟肩あきが狭い、衽下りが少い、立裾が短い、衽幅が広い、後身幅と前身幅とが殆ど同寸法、衽が短い、袖口が狭いといった形態上

の特徴も初期小袖に適合して、日光東照宮の伝家康所用の小紋胴服(美術研究三〇三号拙稿参照)と凡そ同じ時代か、多少はこの小袖の方が時代

が上るのではなからうかといったところである。

この小袖で特に注目をひくのは、その大らかな模様の小紋で、その染色を考察すると次のようになる。

#### (表裂の染色)

先ず紋所五ヶ所に、型紙を使って両面から糊置きをしている。この紋所の径は三・三センチから四センチまで不揃いで、後述するように、これは幾度も藍に浸った為に防染糊の周囲がとけたことを意味する。

その後、薄藍に二浴から三浴させて薄浅葱に染め、次に片面から宝尽し文様の型紙(文様の一かえりが一・三センチ、一枚型)を用いて防染糊の型付を行っている。藍に浸染しているの、この糊は両面から付けられているかと思われたが、裂の破損部から裏面を観察すると、宝尽し文様の裏面からの型付は行われていない。後述するように、この表裂は薄手の比較的目の粗い平絹であるため、表から付けた糊が裏にも或程度廻って表の文様には支障を来さないだけの防染をしているようである。同様のことが薄手の麻製袴等の藍染の小紋にも見られる。<sup>註2</sup>

こうして片面糊置された裂は藍に入り、濃い藍に二浴か三浴しているようである。その間、糊がかりうじて保たれたといった様子がこの遺品資料の防染部、即ち文様部分と紋所部分から窺われて興味深い。砥ぎすまされたような鋭い線など見事に表現できるまでに技術的に進んだ後世の藍染の中形の良さはまた違った、

a

b

c

挿図 1 伝家康所用 浅葱地宝尽し小紋小袖 (A-13)  
a 正面, b 背面, c 部分

蠟防染のような風合さえあると、ぼけた味の藍染の小紋もまた親しみを感じてよいものである。

水洗で糊を落し、乾燥してから、白抜きになっている紋所の部分に黄色で葵の葉の色挿しをし、茶色で線描きを行っている。

また、次に記すような「形状、法量、仕立て方」「表裂・裏裂」の地合等からもその初期小袖に属する諸様相が考察される。

#### （形状・法量・仕立て方）

綿入れ、通し裏。表にも裏にも処々に小さな破損箇所がある。身丈は一三六センチで別に衽が〇・五センチ、衽は六一センチ（左、右は六二センチ）で別に袖口衽〇・七センチ、袖幅は二二センチ（左、右は二二・七センチ）で別に袖口衽〇・七センチ、袖丈五三センチ（左、右は五二・五センチ）、袖口二四センチ（左右とも）、衽下り一二センチ（左右とも）、衽幅二五センチ（左、右は二四・七センチ）、合襟巾二一・五センチ（左、右は二二センチ）、立襟（襟下）三八センチ（左右とも）、襟幅一六センチ（左右中央とも）、襟肩アキ×2は一五センチ、後身幅（裾位置）三九センチ（左右とも）、前身幅（裾位置）三九センチ（左右とも）、重量九二〇グラム。

五つ紋の紋所の位置は、両胸は肩山から一七センチ下った位置に紋所の上端、両脇の袖付線から襟に向って二三センチ内側（左右とも）に紋所の側端が来るように配され、背面は中央（背の紋所）が五センチ両側（両袖の紋所）が六・七センチ肩山から下った位置に紋所の上端が来るよう配されており、その、背面両袖の紋所位置は、両袖とも袖付線から九センチ袖口寄りに紋所の側端が来るよう配されている。

縫い目は平縫は〇・三センチ前後、くけ目は〇・五センチから〇・八センチで、初期小袖の時代のものとしては比較的細かい。袖口衽、裾衽の衽とじの形跡は見られない。背縫の折被せは表裏ともわれわれがいう正常な方向になっている（美術研究二二八号の拙稿挿図3—10頁参照）。縫糸は白S撚絹糸。

#### （表裂）

薄手の平絹で、羽二重よりも粗い。糸の太さは経糸、緯糸殆ど変わらないよう

あり、密度は一センチ間に、経糸が三八本前後、緯糸は三八越前後である。

#### （裏裂）

後染の薄浅葱平絹で、密度は一センチ間に、経糸は三四本前後、緯糸は三二越前後である。

#### A—14 伝家康所用

重文 濃萌黄地鉄線唐草紋小袖（挿図2 a、b、c、二三頁表、台帳では唐

#### 草紋小袖）

綿入れて、仕立は当初のままのうぶなもの。A—13の小袖同様の初期小袖に適合した形態上の特徴を持つが、身頃や袖の形、身頃と袖の比率、衽下りが一〇センチに満たないこと、散らした文様の配し方などから考察するとこれはA—13の小紋小袖よりやや時代が下ると思われる。A—13は桃山に入るものであろうし、このA—14は江戸初頭であろう。

匹田鹿の子の紋り技法で鉄線唐草風な模様が散らしてあり、水戸の徳川家に伝わる家康所用小袖（挿図3）に、この小袖に似たものがある。

この小袖に形態と、紋り技法、模様の種類や配置等が似ていて、恐らく同じ工房で出来たものであろうと推察されるのである。紀州東照宮のこの小袖は、模様が鉄線唐草風な唐草模様だけの飛模様で、それも匹田鹿の子一種類の紋り技法しか使用せず、色も濃萌黄地に模様部分が白抜きで、唐草の線ものびやかに、極めて単純にすっきりとした出来である。

それに較べて水戸の徳川家伝来の小袖は、紺地に唐草の丸が白抜きの匹田紋りというのは似ているが、唐草の丸の中には、縫締め紋りと色挿しと帽子紋りで表出された菊花がある。更に五つ紋付になっており、この三つ葉葵の丸紋が唐草の中の菊花同様の技法で多色にあらわされている。

るから、やや煩雑な感じになっている。

(形状・法量・仕立て方)

綿入れ、通し裏。両袖口の裏側の汚れと襟の首に当たるところの汚れがある。身丈は一二八センチで別に衽が二・八センチ、衽は五一・五センチ(左、右は五二センチ)で別に袖口衽が左袖口に〇・八センチ、右袖口に一・三センチ、袖幅は二〇センチ(左右とも)で別に袖口衽が左袖口が〇・八センチ、右袖口に一・三センチ、袖丈は四五センチ(左、右は四三・五センチ)、袖口一六・五センチ(左右とも)、衽下り九・五センチ(左、右は一〇センチ)、衽幅二一・三センチ(左、右は二二・七センチ)、合襟幅一九センチ(左、右―下前―は一九・五センチ)、立襟(襟下)三七・八センチ(左、右―下前―三七・五センチ)、襟幅一五センチ(一五・五センチのところもある)、襟肩アキ×2は一六・三センチ、後身幅(裾位置)三八センチ(左右とも)、前身幅(裾位置)三八センチ(左、右―下前―は三七・五センチ)、重量は六七〇グラムである。

縫い目は平縫は〇・二センチから〇・三センチと細かく、くけ目は〇・五センチから〇・八センチであるが、袖付の裏のくけ目は一センチ前後と粗い。袖口衽、裾衽の衽とじの形跡は見られない。背縫の折被せは表はわれわれがいう正常な方向、裏は逆になっている(美術研究二三八号の拙稿挿図3―二〇頁―参照)。縫糸は表裂も裏裂もすべて白S燃絹糸が用いてある。

a

b

c

挿図 2 伝家康所用 濃萌黄地鉄線唐草絞り小袖(A-14)  
a 正面, b 下前, c 背面

(表裂)

きめこまかな羽二重で、経糸は緯糸より細く、密度は一センチ間に、経糸は四八本前後、緯糸は四八越前後である。

(裏裂)

後染の水浅葱平絹の通し裏で、羽二重。経糸は緯糸より幾分細く。密度は一センチ間に、経糸は四八本前後、緯糸は三六越前後である。

A-15 伝家康所用

白小袖(挿図4、一二三頁表、台帳でも白小袖)

綿入れで、汚れは多いが傷んではない。仕立は当初のままのうぶなもの。袖は筒袖に近い薙袖で、形や仕立て方から見て下に襲ねて着用した小袖であろう。A-13、A-14の小袖同様の初期小袖に適合した形態上の特徴を持つが、身頃と袖幅の比率や衽下りが九センチと一〇センチ以内の長さであることから江戸初頭というよりも江戸前期前半(表参照)の様相を見せているようである。

(形状・法量・仕立て方)

綿入れで、表裏共裂、通し裏、前述したように汚れが多い。身丈は一二二・五

挿図 4 伝家康所用 白小袖 (A-15)  
正面

チ、袖丈は三九・五センチ(左、右は三九センチ)、袖口は一七センチ(左右とも)、枉下りは九センチ(左右とも)、枉巾は二三センチ(左右とも)、合襖幅は二〇センチ(左右とも)、立襟(襟下)二七センチ(左右とも)、襟幅一七センチ、襟肩アキ×2は一五センチ、後身幅(裾位置)三八・五センチ(左右とも)、前身幅(裾位置)三八・五センチ(左右とも)、重量は四九〇グラム。

縫目は平縫は〇・二センチから〇・三センチと細かく、くけ目は〇・五センチから〇・八センチである。袖口衽、裾衽の衽とじの形跡は見られない。背縫の折被せはA-14と同様、表はわれわれがいう正常な方向、裏は逆になっている(美

挿図 3 紺地葵紋菊唐草の丸散模様辻が花染  
小袖 背面

水府明徳会蔵

センチで別に衽が〇・五センチ、衽は(左右とも)六四・五センチで別に袖口衽が一・二センチ、袖幅は(左右とも)二五・五センチで別に袖口衽が一・二センチ

術研究二三八号の拙稿挿図3-20頁参照。縫糸は白S撚絹糸が用いてある。

(表裂・裏裂)

前述したように表裏共裂で、比較的薄地の羽二重が用いてある。密度は一センチ間に、経糸は四六本前後、緯糸は三八越前後である。

B-4 伝家康所用

重文 白綾葵紋付小袖(挿図5 a、b、二三頁表、台帳では小袖)

白綾地で、織出しの五つ紋付である。綿入れ。仕立は当初のまま。保存状態が極めて良好である。前出三領の小袖同様、初期小袖に適合した形態上の特徴を持つ。形態上から見ると、A-13とA-14の小袖の中間位の製作年代ではないかと思われる。

(形状・法量・仕立て方)

A-13に近い形と重さの小袖で、綿の入り加減も似通っている。裏は白羽二重の通し裏、身丈は一三五・五センチで、当初は衽があったようであるが現在は衽分が内側に入ってしまった不詳である。この小袖の寸法は左右が殆ど同寸法で、衽は五一・五センチ、袖幅は二〇センチに袖口衽が〇・二センチ、袖丈四二・五センチ、袖口一六センチ、枉下り一二センチ、枉幅二三センチ、合襖幅二〇



挿図 5 伝家康所用 白綾葵紋付小袖 (B-4) a 正面, b 部分

センチ、立襟(襟下)三〇センチ、襟幅一五・五センチ、襟肩アキ×2は一五センチ、後身幅(裾位置)三六センチ、前身幅(裾位置)三六センチ、重量は八八〇グラム。

五つ紋の紋所の位置は、両胸は肩山から一

五センチ下った位置に紋所の上端、両脇の袖付線から襟に向って八・七センチ内側に紋所の側端が来るように配され、背面は中央（背の紋所）が六センチ、両側（両袖の紋所）が七センチ肩山から下った位置に紋所の上端が来るよう配されており、その背面両袖の紋所位置は、両袖とも袖付線から五・五センチ袖口寄りに紋所の側端が来るよう配されている。

縫目は、平縫はほぼ〇・二センチ平均のこまかく揃った針目で、くけ目は〇・五センチから〇・八センチで、初期小袖時代のものとしては比較的こまかい。この小袖にも袖口襷、裾襷の襷とじの形跡は見られない。背縫の折被せは表裏ともわれわれがいう正常な方向になっている（美術研究二八号の拙稿挿図3—120頁参照）。縫糸は白S撚絹糸。

#### （表裂）

葵の五つ紋が織出しの白綾で、光沢のある純である。地は経の六枚綾で（右上り）、紋所の部分は地の裏組織で緯の六枚綾（左上り）、丸紋は外径が縦が六・二センチ、横が六・五センチ。裂地の密度は一センチ間に、経糸は七〇本前後、緯糸は四二越前後。

#### （裏裂）

白羽二重で、密度は一センチ間に、経糸は四八本前後、緯糸は四四越前後。

### 四 むすび

以上で紀州東照宮に蔵される家康所用と伝えられる四領の小袖についての調査報告を行ったが、これら四領は何れも伝来がよく、保存状態もよく、優品であり、且つ初期小袖の遺品資料として極めて残存数の少ない実用小袖である。それが四領共に仕立てが当初のままという至極稀な好条件を具えている。二十余年前、当時東京国立博物館の染織室長山辺知行氏によって発見された米沢の上杉家伝来の服飾類中に、謙信所用と伝えられる実用に供された小袖が十二領あり、それらは優品である上に仕

立てが当初のままの状態であったので、初期小袖の研究にとっては願ってもない有難いことであった。以後二十有余年そのような発見はなく、ここに報告した紀州東照宮の徳川家康所用小袖四領が昭和四十九年秋発見確認されたのが上杉謙信所用小袖十二領以来の有意義な発見だったのである。

筆者はかつて上杉謙信・景勝所用小袖十二領を調査し美術研究二八号誌上に発表した折に「近世小袖実測寸法比較対照表（男物）」を発表した。それから二十年経過した今、紀州東照宮の家康所用小袖四領を加え、更に先年発見された石見益田家伝来の「白茶地桐竹文綾小袖」も加えて、美術研究二二八号一七頁の表を改訂したいと考える。

では、はじめにも述べたように石見益田家伝来の小袖についての紹介を行う。

重文 白茶地桐竹文綾小袖（図版ⅤⅥ、二三頁表）文化庁保管（益田兼施氏旧蔵）

山口県教育委員会の文化財総合調査で益田家に伝来するその小袖が世間に知られることになり、昭和五十四年六月には重要文化財に指定、翌昭和五十五年には文化庁買取となった。

薄綿入で、表は白茶地の桐竹文綾、裏は白平絹の通し裏である。裏に少々汚れがあり、裏裾に多少のほころびがある程度で保存状態はよい。仕立も当初のままと見られる。袖幅が狭く身幅が広い、襟肩あきが狭い、衽下りが少ない、立褄が短い、衽幅が広い、後身幅と前身幅とが殆ど同寸法、衽が短い、袖口が狭いといった形態上の特徴が初期小袖に適合している。永禄九年銘の辻ヶ花染小袖（表参照）や上杉謙信所用小袖（表参照）と形態の上からもほぼ同時代と考えられる。



近世小袖実測寸法比較対照表（男物）（美術研究228号17頁所載の表を追加改訂したもの）

寸法の単位は cm

		a 袖巾	b 後身巾	b a	c 襟肩 アキ×2	d 衽下リ	e 立褙	f 衽巾	g 合褙巾	h 前身巾	h b	i 衿	j 袖口	k 襟巾	l 袖丈	m 身丈	備 考	重 量
室 町 末 ・ 桃 山	(永禄9年銘)辻ヶ花染小袖 薄綿入 1566年	21.5	38.5	1.79	13.0	14.0	40.0	25.0	20.0	38.0	約1	60.0	17.0	14.0	47.5	130.0		280 g
	石見益田家伝来白茶地桐竹文綾小袖 薄綿入（室町）	22.0	36.5	1.66	16.0	16.0	39.0	24.5	20.0	37.5	〃	60.0	23.5	14.0	50.5	130.0		495 g
	伝上杉謙信所用小袖(1)薄綿入 1550～1600年頃(永禄～慶長頃)	21.0	37.0	1.76	13.5	13.0	36.2	22.0	20.2	37.0	〃	57.0	21.2	15.0	49.5	129.0	小袖型胴服	725 g
	同 上 (2)薄綿入 〃	19.0	37.2	1.97	13.5	13.4	32.5	18.0	16.5	37.5	〃	56.2	22.5	11.5	48.7	121.2	〃	不詳※
	同 上 (3)薄綿入 〃	20.5	37.0	1.83	12.0	15.2	34.5	20.5	17.5	36.0	〃	57.0	21.5	13.5	47.0	125.0	〃	不詳※
	同 上 (4)袷 〃	20.5	37.5	1.82	14.5	12.7	38.0	21.0	18.0	37.5	〃	58.0	20.0	12.7	47.0	125.0	〃	505 g
	同 上 (5)袷 〃	21.5	37.5	1.74	14.5	12.0	35.7	23.0	20.3	36.0	〃	59.0	21.0	13.5	46.5	126.0	〃	545 g
	同 上 (6)袷 〃	20.0	38.0	1.90	12.0	14.0	37.0	20.0	19.5	37.0	〃	58.0	20.5	15.5	48.5	133.0	〃	460 g
	同 上 (7)袷 〃	23.0	39.5	1.71	12.0	13.5	41.0	24.0	19.5	39.5	〃	60.5	21.0	13.0	45.5	131.0	〃	535 g
	同 上 (8)厚綿入 〃	20.5	36.5	1.78	14.0	10.0	34.0	23.0	21.0	36.0	〃	57.5	20.5	13.0	45.0	131.0	〃	1085 g
	同 上 (9)引解 〃	20.5	37.0	1.80	15.0	14.0	35.5	22.8	18.5	37.8	〃	57.5	21.2	13.0	48.5	127.0	〃	440 g
	同 上 (10)袷 〃	19.7	37.0	1.87	12.0	16.0	32.5	24.0	20.0	37.0	〃	56.3	32.5	16.3	46.5	124.0	〃	300 g
	同 上 (11)薄綿入 〃	17.0	37.8	2.22	15.0	14.5	26.5	22.7	21.0	37.8	〃	54.5	21.0	13.2	48.0	115.0	背割れ有 同 上	390 g
	同 上 (12)薄綿入 〃	20.0	34.5	1.72	12.0	13.3	27.5	20.3	20.0	35.0	〃	54.5	19.0	11.5	46.0	117.3	〃	370 g
	勝手神社肩裾	20.5	37.0	1.80	14.0	14.0	41.5	24.0	19.0	37.0	〃	57.5	20.0	13.5	49.0	132.0	〃	
	春日神社白地松に藤蝶紋散し縫箔	22.0	39.0	1.77	15.5	11.0	33.5	25.0	21.0	39.0	〃	61.0	16.5	14.5	59.0	130.5	〃	
	春日神社薄紅練緯小袖	22.5	36.5	1.62	15.5	10.5	36.0	24.0	20.0	35.0	〃	59.0	16.5	15.0	54.5	127.5	〃	
江戸 前期 後半	伝徳川家康所用紺地梅梅様辻ヶ花染小袖 厚綿入（慶長頃）	27.0	37.5	1.37	14.0	9.0	34.5	24.0	20.0	37.5	〃	64.5	23.0	17.0	51.5	138.0	極めて厚い 綿入	2060 g
	紀州東照宮蔵伝徳川家康所用小袖（A-13）綿入（慶長頃）	22.0	39.0	1.77	15.0	12.0	38.0	25.0	21.5	39.0	〃	61.0	24.0	16.0	53.0	136.0	〃	920 g
	同 上 （A-14）綿入（江戸初頭）	20.0	38.0	1.90	16.3	9.5	37.8	22.3	19.0	38.0	〃	51.5	16.5	15.0	45.0	128.0	〃	670 g
	同 上 （A-15）綿入 〃	25.5	38.5	1.51	15.0	9.0	27.0	23.0	20.0	38.5	〃	64.5	17.0	17.0	39.5	112.5	〃	490 g
	同 上 （B-4）綿入 〃	20.0	36.0	1.80	15.0	12.0	30.0	23.0	20.0	36.0	〃	51.5	16.0	15.5	42.5	135.5	〃	880 g
江戸 中期 後期	徳川二代将軍秀忠紗綾小袖 綿入 1632年（寛永9年）	23.0	36.0	1.56	15.5	10.0	35.5	24.0	20.0	37.0	約1	59.0	不詳	15.0	53.0	135.0		
	同 上 平絹小袖 綿入 〃	23.0	36.5	1.58	不詳	12.0	31.0	24.0	不詳	39.0	〃	58.5	不詳	15.0	46.0	130.0		
	伝片倉重長所用黒襦子小袖 厚綿入 1600年～1640年頃 （慶長～寛永頃）	27.0	39.0	1.44	15.0	9.0	42.0	22.0	18.5	36.0	0.92	66.0	18.0	15.5	48.0	135.0	極めて厚い 綿入	
	伝徳川光圀所用白羽二重小袖 綿入 1630年～1670年頃 （寛永～寛文頃）	29.0	40.5	1.39	14.0	10.0	44.5	24.5	20.5	40.5	1.00	67.0	19.5	14.0	47.0	140.0	〃	
江戸 後期	この間三・四十年は、小袖の形態上でも最大の転換期。しかし、 年代が明らかで「うぶ」な実物資料は現在のところ皆無。																	
	伝朝倉半蔵所用小桜小紋小袖 綿入 1700年前後頃（元禄頃）	32.0	30.0	0.93	15.5	15.5	58.0	17.0	14.5	27.0	0.90	62.0	26.5	13.0	46.0	132.0		685 g
	徳川十二代将軍家慶白綾単 1853年（嘉永6年）	29.0	32.5	1.12	16.5	18.5	55.5	19.5	15.0	32.0	約1	61.0	24.5	10.0	45.0	128.0		
	伝徳川斎昭しじらのしめ小袖 綿入 1820年～1860年頃 （文政～安政頃）	33.5	32.0	0.95	16.5	18.0	68.0	18.0	14.2	26.5	0.82	65.5	26.0	11.5	49.0	139.0		
現代	同 上 下着 綿入	32.0	32.0	1.00	15.5	16.5	66.0	19.0	14.5	25.0	0.78	64.0	26.0	11.5	46.0	133.5		
	現 代 標 準（身長166cm）1962年現在	32.5	33.0	約1	17.0	20.0	67.0	15.0	13.5	25.0	0.75	65.5	27.0	6.0	51.0	140.0		

※ この二値は重量を測定する以前の昭和38年度修理で裏打と樹脂加工が行われたため本来のものの重量は不詳である。

益田家の伝来では、家伝によると益田宗兼（天文一三年歿）が、永正八年（一五一二）城州船岡山の合戦で功があり、十代將軍足利義植（文正元年〜大永三年）から、道服と共にこの小袖を拝領したという。

（形状・法量・仕立て方）

薄綿入れで、通し裏。身丈は一三〇センチで別に衽が〇・五センチから一センチ。衽は六〇センチ、袖幅は二二センチ（左右とも）で別に袖口衽が〇・二センチから〇・五センチ、袖丈は五〇・五センチ（左右とも）、袖口は二三・五センチ（左右とも）、衽下り一六センチ（左右とも）、衽幅は二四・五センチ（左右とも）、合襖幅は二〇センチ（左右とも）、立襖（襟下）は三九センチ（左、右は三八センチ）、襟幅一四センチ、襟肩アキ×2は一六センチ、後身幅（裾位置）三六・五センチ（左右とも）、前身幅（裾位置）三七・五センチ（左右とも）、重量は四九五グラム。

縫い目は平縫が〇・五センチから〇・八センチ、くけ目が一・五センチ前後と針目が大きい。縫糸は白Z撚絹糸。背縫の折被せは表裏ともわれわがいう正常な方向になっている（美術研究三二八号の拙稿挿図3—二〇頁—参照）。

（表裂）

図版で見られるような室町時代の染織品に屢々見られる古様の桐竹文様綾で、文丈は二二・五センチ、窠間幅は八・五センチ、地は経の六枚綾で（右上り）、文は緯の六枚綾で（左上り）、経糸は緯糸に比べて細く、密度は一センチ間に、経糸は六〇本前後、緯糸は三〇越前後である。

（裏裂）

白絹の通し裏で、緯糸が太く、経糸の約倍の太さである。密度は一センチ間に、経糸は四四本前後、緯糸は二七越前後である。

以上、紀州東照宮伝来の小袖四領、石見益田家伝来の小袖一領と最近発見の実用小袖五領について調査報告を行い、それら初期小袖五領を二十年前に作成した「近世小袖実測寸法比較対照表（男物）」に加えて表の改訂としたが、筆者のこの基礎資料選択とその調査内容が、染織史・服

飾史に確実な礎石となることを望むものである。更には風俗画や肖像画、肖像彫刻の分野にも役立つことを願っている。

資料価値の高い優品の新出をわれわれは常に待期しているのであるが、その機はなかなか到来しない。今回の紀州東照宮蔵小袖四領と石見益田家伝来の小袖一領は、こうした意味でも極めて有難い、価値の高い優品資料の発見であったと言えるであろう。

（一九八一年一月）

註

- 1 当時の綿入れは殆どすべてが真綿で、実物資料で最古の木綿綿は毛利家（もみんわた）に伝来する伝毛利秀就所用緋絹産衣の中入綿（拙稿の美術研究二六七号一三頁参照）である。
- 2 尾張の徳川家に家康所用と伝えられる小紋の裃類が一具三領四腰の計九点あり、このうち藍の浸染と思われるものが大半であるが、それらは裂の地質が薄く（肩衣の方は特に薄く、透けている）、防染糊は紋所部分だけが両面糊置で、他は片面糊置で、藍の浸染がなされている（拙著「型染」—昭和五十年、芸艸堂— 図版18、22及び図版解説参照）。